

## 会議の概要（議事録）

会議の名称	(番号) 1-38	令和元年度第2回 墨田区図書館運営協議会		
開催日時	令和元年9月21日（土） 午前10時から正午まで			
開催場所	墨田区立ひきふね図書館5階会議室			
出席者数	<p>【委員】7名 上田 修一（会長）、吉岡 大司、駒田 るみ子、藤山 光子、齊藤 宮子、佐藤 弘行、原 平充</p> <p>【オブザーバー】4名 栗原 史成、小川 政美、佐藤 八代以、近藤 幹子</p> <p>【事務局】5名 ひきふね図書館長、ひきふね図書館次長、ひきふね図書館主査、ひきふね図書館担当職員2名</p>			
会議の公開 (傍聴)	公開(傍聴できる)	部分公開(部分傍聴できる)	傍聴者数	3人
	非公開(傍聴できない)			
議 事	<p>1 墨田区子ども読書活動推進計画（第4次）の骨子について</p> <p>2 その他</p>			
配 付 資 料	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 次第</li> <li>・ 資料1 墨田区子ども読書活動推進計画（第4次）骨子（たたき台）</li> <li>・ 資料2 墨田区子ども読書活動推進計画（第4次）施策体系（たたき台）</li> <li>・ 資料3 墨田区立図書館電算システムの更新及び機器交換に伴う臨時休館について</li> <li>・ 参考資料 墨田区子ども読書活動推進条例</li> <li>・ 参考資料 令和元年度 第2回運営協議会 出席者名簿</li> </ul>			
会 議 概 要	<p>議事1</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 不読率の目標や、調査における定義の問題（p.1-2, p.6）</li> <li>・ 学校図書館の環境や雰囲気作り（p.2-3）</li> <li>・ 図書ボランティアの連携など（p.4-5）</li> <li>・ 中高生に対する施策についての議論（p.7-9）</li> </ul> <p>議事2</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 電算システムの更新に伴う臨時休館について報告（p.10）</li> </ul>			
所 管 課	ひきふね図書館（電話：5655-2350）			

## 議事第 1

### 墨田区子ども読書活動推進計画（第 4 次）の骨子について

上田会長 第 1 番目の議事に入る。事務局に説明をお願いしたい。

高村館長 資料 1「墨田区子ども読書活動推進計画（第 4 次）骨子（たたき台）」、資料 2「墨田区子ども読書活動推進計画（第 4 次）施策体系（たたき台）」、参考資料「前回（6 月 1 日）の運営協議会での主な意見」について説明

上田会長 このことに関して何か質問や意見はあるか。

藤山委員 資料 1 の「第 3 次計画期間における課題」の乳幼児の読書活動で、読書習慣の形成が十分でないというところがあるが、これは図書館の乳幼児の貸出数が少ないということなのか。

高村館長 貸出数が少ないというよりも、図書館に来る利用者と話をしている、絵本のことをよく知らない人が多い、という印象を受ける。

原委員 資料 1 の見方だが、第 2 章「これまでの取組・成果と課題」の中で、2 の学校における子ども読書活動の推進の不読率（中学校平均）はあまり変わらない。それに対し、第 4 章「子ども読書活動推進のための施策及び目標値」の不読率実績の H30 は改善しているように見える。どちらが正しいのか。

高村館長 第 4 章の数値の記載は誤記載である。お詫びする。

原委員 そうすると資料の見方として、小学校の不読率は改善しているので、これをもっと良くしていく。中学校では、この 5 年で改善していないが、令和 6 年度の目標を達成しようということか。

高村館長 努力して 5 年後には改善させようと考えている。

原委員 高い目標を掲げるのはいいことだと思うが、先ほどの施策を行えば、この第 4 章の不読率の目標を達成できるのだろうか。もう少しイメージが掴める方が、図書館や学校関係者も積極的に取り組めるのではないかと感じた。

駒田委員 同じく不読率で質問だが、これは調査結果による不読率の数字だと思うが、学校で借りた本を朝読書で読むことを、読書をしたことに入れるか入れないかという話がある。不読の定義はどうなっているのか。

高村館長 不読率の調査である i-check の場合、1 週間や 1 カ月で何冊読んだかをチェックするものだ。この数値を墨田区は第 1 次計画からずっと目標にしてきた。

駒田委員 調査するとき、「朝読書で自由な読書をしている場合には入れていい」とか、「授業の中で読むのは入れない」とか、「家で読まないといけない」とするのかなど、学校や教員の考え方で回答に開きが出ているように感じる。ここの部分は、こう答えるという示しがないと、回答の差が出てくると思う。

高村館長 この調査は、60 問くらいのアンケートを 4 月と 9 月に行っている中で、「1 カ月に 1 冊読んでいますか？」という質問項目である。朝読書などを含むか否かまでは質問文には記述されていない。児童・生徒の捉え方によって、答え方に違いが出る。

駒田委員 朝読書であっても、学校で読んでいるから読書ではなくて勉強なのかと考

えて、不読と回答している子どももいるのではないか。私の経験としては、学級や子どもによって、その点を質問してくることはあって、「自分の意志で読んでいるのであれば、場所はどこだろうが、それは読書でいいですよ」と答えていた。しかし中には、学校は勉強であり、家で読まないといけないという理解の子もいたようだ。

**高村館長** 先生によって生徒の捉え方が違ってくるといえることか。

**駒田委員** 私は中学校の図書館部会も担当しているので、そこでも伝えていこうと思うが、本人の自由意志によって本を読むのであれば、それは読書と考えていいのではと思うが、捉え方が違う子どもや先生がいるのは確かだと思う。印象として、H30の中学校の不読率は23.4%となっているが、もっと低いのではないかと感じている。

**上田会長** 調査方法を変えてしまえば、不読率が下がったりすることもあり得るというのは、いろいろ問題があるところだ。H25とH30の中学校の不読率があまり変わらないということは、「不読率を25年度と比べて令和6年度には半減させる。」というのは、平成30年度から半減させるのと同じ意味になるが、大丈夫なのか。これまでの5年間でほとんど変わらなかったものを、今後の5年間で半減させるという話だと思うが。

**高村館長** そういうことである。国や都の計画に基づいて、市町村については地域の実情を勘案して定めるということになっている。国や都も半減させるという目標を立てており、高い目標だとは認識しているが達成に努めていきたい。

**齊藤委員** 先日、中学校の点字の授業に行く機会があったので、図書室を見学させてもらった。新しく建て直しているので図書室がとても素敵にできていて、生徒の利用や貸出も伸びて、読書率もすごく上がったという話があった。展示もよくできていて、こういう図書室なら生徒も使いたくなると思った。本の内容もそうだが、部屋の雰囲気も大事かもしれない。学校の中のサードプレイスというか、教室には行けないが保健室には行けるといふ生徒もいると思うので、「保健室ではなくて図書室でもいいよ」という環境を作ればいいのかと思う。また、墨田区でも学校司書が配置されていると思うが毎日来ない。司書が毎日いて生徒と接するといい。中学生は先生にも親にも言えないことがあるので、「それならこういう本を読んだらいいかもね」という薦め方もある。学校に常駐していて、その学校の生徒のことをよく知っていないと、そういうことは難しい。私も高校で非常勤で先生をやっているが、問題を抱えた生徒は週に1回行くだけだと把握できない。司書もそれは同じかなと思う。特に中学校では、意識的に常駐の司書を増やしてもらうことが不読率を下げることににつながるのかなと思う。また、ひきふね図書館では、ひきふね図書館パートナーズの活動で、中高生の「おもてなし課」というのをやっているが、なかなか来てくれる生徒が少ない。もっとPRしたら興味を持って来てくれる生徒もいるのではないか。もう少し図書館で後押ししてもらって、それがうまくいけば、他の図書館でも同じようなことをやってほしいと、ひきふね図書館から言ってもらえればと思う。

**上田会長** 今回参加のオブザーバーの方々が、どのように感じているのかを聞きたい。

**佐藤オブザーバー** 学校によって図書室の環境も違う。私の小学校の図書室は生徒数が少ないのでゆったりしている。気持ちが落ち着かない子や、授業中に悩んでいる子などは保健室に行くことが多い。そうすると先生によっては、「では図書室で本を読もうか」となる。授業には出られなくても本を読めば参加しているという気持ちになるのではないかと促してくれる先生もいる。私も図書ボランティアとして環境整備をしていて、図書室の本を子どもたちが借りると並びが乱れてしまうので、そういう整備を手伝ったりしている。また壁面飾りといって、少しでも子どもたちが和むように、季節ごとに黒板などに夏祭りの花火やお店を作ると、子どもたちが楽しみにやってくる。子どもたちが毎日いるのは学校の中であって、学校の中で読書をしようとする、授業の合間や、放課後や休み時間に来ることが多い。学校の図書室に本がない場合でも図書館の状況を調べてくれる司書もいて、そのように学校だけでなく図書館や図書ボランティアと連携していけば、不読率も少しずつ改善していくのではないかと。子どもたちが、自分の落ち着けるような本を見つけ出し、その本を好きになって、その本から世界が広がるということが大事なのではないかなと思う。中学校の不読率がそんなに変わらないというのは、中学生になると部活や塾で忙しい。また、閉鎖的な図書館というのは、女の子にとっては怖いというイメージがある。書架で本を探しているときに、知らない大人が来るとびっくりすることがある。私がよく行く図書館では、調べるコーナーのところ少し奥にあって、隔離されてしまう部分がある。子どもたちにとって、カフェとまではいかななくても、雑談をしてもいいという感じで気軽に来れるような居心地のいい環境を作ること、考えた方がいいのかなと思った。

**藤山委員** 私は「民話を語ろう」という出前授業で、小学校によく呼ばれるが、その校長先生から、学校では作文に力を入れていて子どもは本をよく読むという話も聞く。

**高村館長** 学校図書館に司書を配置しており、学校図書館を楽しく居心地のいいところにするよう言っている。しかし、中学校は週2日、一部の小学校については週3日配置しているが時間が短く、不十分なところはあると思う。私も小中学校の図書室を機会があったら見ているが、小学校は楽しい感じがする。また、図書館の環境改善や安全については配慮していきたい。

**上田会長** 齊藤委員から指摘の学校図書館の人の面についてはどうだろうか。

**高村館長** 人の面では充実させていきたい。施設の面で、校舎を新築した中学校については、かなり広い空間が確保されているが、他の中学校ではなかなかそうはいかない。区全体の改築計画にも関わってくるが、狭いながらも書架を調節するなど改善に努めていきたい。

**上田会長** 先ほどの書架が高くて暗いと、女の子は嫌がるというのは理解できるところで、行きたくないと思ったりすると問題だと思う。最近新しくできた図書館を見ても、書架を低くして、光がよく当たるようにするなど工夫しているようだ。

それから、「おもてなし課」というのは、どういうものなのか。

**齊藤委員** 「おもてなし課」担当のボランティアが傍聴人にいる。説明してもらってもいいだろうか。

**上田会長** お願いしたい。

**鈴木傍聴人** 「おもてなし課」というのは、ひきふね図書館の開館に合わせて、図書館で中学生がイベントをするということで結成された中学生のボランティアグループである。中学生だった人が高校生になって、引き続き参加したいということで、現状は中学生と高校生、メンバーは8人くらいだ。忙しいので、なかなかメンバーが集まらないという現状がある。昨年度までは中学生と高校生で、やりたい企画を立てて実施していたが、集まりが難しかったりした。それなので今年度は2カ月に1回、例えば点字の先生に来てもらい点字の講座をして、そのとき点字の余り紙が出るので、それで工作をして図書館に飾ってもらうなどして、少しでも図書館に親しみを持ちながら活動してもらえるよう企画をしている。私ともう一人ボランティアの女性でやっていて、中高生は忙しいが図書館という第3の場所で、全然関係ない大人と接するのも一つの経験かと思うので、そういう想いで行っている。しかし人が来ないので、もし興味のあるような人がいたら、声をかけてもらえればありがたいと思う。

**齊藤委員** 補足すると昨年、図書の選書の仕方なども知りたいということで、図書館の職員にお願いして選書の仕方を学んだり、藤山委員に先生として来ていただき読み聞かせの方法を勉強して、小さな子どもに読み聞かせするなどした。興味のある人たちには楽しいのではないかと思う。

**近藤オブザーバー** 本の楽しさを知ってもらうなどの図書ボランティアの取組というのも大事だと思うが、新築の中学校の図書室が素敵だという齊藤委員の話聞いて、私も見たいと思った。しかし、なかなか自分の子どもの所属している以外の学校図書館に行く機会がない。自分の学校図書館の飾り付けをしたり、環境整備をする機会はあるのだが、別の学校図書館がどういう取組をしているとか、他の学校の図書ボランティアがどういう活動をしているのかを知る機会がない。以前、図書館で読み聞かせの講座があって参加したときに、各校のそれぞれボランティアの人が集まっていたので、そこで話をしたことがある。そのときは別の学校ではこういうことをやっているのだな、ということ少し聞くくらいだったので、もう少し横のつながりがあるといいと思う。ただ、どうすれば横のつながりが取れるかもわからないので、区内でいろいろ連携すれば情報交換もできるし、嬉しいかなと思う。中学校にも、図書ボランティアというものはあるのだろうか。

**駒田委員** 今は区内の中学校に図書ボランティアはいないようだ。他区から異動してきた先生が「前任の中学校では図書ボランティアの人が入って読み聞かせをやっていてとてもよかった」という話をしており、墨田区でも同じようにできないかなと思う。委員の皆さんは子どもの頃、朝自習をやっていた世代だと思う。その後、朝読書がだんだん広がって、平成に入って墨田区でも朝読書をやる学校が増えた。そ

の頃、学校によっては荒れていて、なかなかボランティアの人にお任せするのが難しいという状況もあった。今ほどこの学校も落ち着いて生活できていると思うので、ぜひやっていかなければと思う。一方、放課後は部活があり、6時間の授業以外には、なかなか勉強時間も取れないため、朝読書をやめていく学校もある。

**高村館長** 朝読書の目的は読書ではなく、子どもたちを落ち着かせるのが主目的であると聞いている。

**駒田委員** いろいろなボランティア活動もそうだと思うが、最初は無理やりでも引っ張ってやらせないと、楽しさや意義はわからない。読書も、入口のところでは、これを読みなさいという一斉読書のようなことをやって、次の一冊は自分で選ぶことができるようになっていく。確かに私の中学校は、朝読書の時間は休校なのかと思うくらい、すごく静かである。だから生徒の落ち着きのためでもあるのだが、そこまで集中して読めるということは、その本の続きが読みたいという気持ちはきっとあると思う。逆に言うと、その時間でしか読めない生徒もいる。自分の生活を考えたとき、朝読書の時間がなくなったら、自分はいつ読書をしたらいいのだろうと言う子もいると思う。まずは読書の時間を確保してやるというのが、中学校の役割として大事なかなと思う。

**高村館長** 読書はきちんと一節や一章を読み切らなくてはいけないというような概念がある。しかし読書の工夫として、例えば一節すべて読まなくても、1ページだけ読んでもそこに葉を挟んでおけばいい。そうすれば10分ほどの短い時間でも、それを繰り返して読書が続けられる。

**上田会長** 他には何かあるだろうか。

**藤山委員** 親が子どもに読んであげるときは、技術はいらず、どのように読んでもいいと思う。お話会で大勢の子どもに読むときであれば、技術は必要だと思うが。

**高村館長** 先ほどは言葉が足りず申し訳ない。確かに親の場合は、一緒にいて愛情を持ちながら本を読むのでいいと思う。昨年、絵本講座をやったとき、保護者の人たちはあまり絵本のことを知らないようだったので、発達段階によってどういう本が適当なのか、本のことをもっと知ってもらえればという意味である。

**上田会長** 保護者が絵本のことを知らないというのは、どういう絵本があるのかを知らないということか。

**高村館長** そうである。図書館員が利用者と対応している中でそう感じている。最近、絵本セットというのを試しに実施した。評価の高い絵本を5冊くらいセットにして手提げ鞆に入れて、そのセットを貸出しする。これが意外と評判がよく、やはり保護者は絵本にあまり詳しくないのかなと感じる。

**上田会長** それはひきふね図書館だけではなく、全館でやっているのか。

**高村館長** 今はひきふね図書館で試行的に行っている。ある程度成果が上がれば、全館に広めていきたいと思っている。

**齊藤委員** 点訳の活動で、視覚障害のある親御さんに、自分の子どもに読んであげたい絵本に点字シートをつける活動をしているが、絵本の選書をするときに困ってし

まった。どういう絵本を選んだらいいかわからない。そのときは点訳で関わりのある職員に個人的に頼んだら素晴らしいリストを出してくれた。図書館ホームページのこどもページには、おすすめ本のリストを出してくれているが、比較的新しい本の紹介が多く、昔からの名作絵本などがあまり出ていなかったりする。保護者の方もそうだが、それ以外の人にとっても、興味を持った場合にどうしたらいいかわからないということがある。図書館でレファレンスをやっていることがわかっている人でも、実際どこでどう聞けばいいのだろうと考えてしまう。私は、知り合いの図書館員に直接聞くことができたが、そのようなルートがない人にとっても、聞きやすい感じで、案内がされているといいかなと思う。

**上田会長** 確かにそれらはレファレンスサービスとはやや違う感じがする。

**齊藤委員** 調べもので聞くのはレファレンスだと思うが、小学校1年生に読ませるにはどんな本がいいかなど、そういったのはレファレンスなのだろうか。

**上田会長** 図書館の専門性の中では、本を選ぶというのは大きな部分を占めていて、ノウハウも持っているので、子どもだけではなく、大人にもそういうことをした方がいいのかなと感じた。

**吉岡委員** 資料1の第2章「これまでの取組・成果と課題」を見ると、いろいろな成果と課題があるようだ。第4次計画になると、ここに書いてある以外にももっと増えてくることと思う。そのとき不読率の目標というのが、やはり気になってしまう。

**高村館長** 不読率は主要な目標の一つであるが、実際はこれだけではなく、施策ごとの細かい指標を積み重ねてある。

**吉岡委員** 小学校3年生の不読率を見たときに不読率は高いと思う。今の小学校の実態を見ていると、すごく読んでいるなど感じる。学校でもかなり指導していると思っている。それなので、調査の聞き方で数字が変わったり、教員の指導や啓発や周知の仕方によって、各学校によって数字が違ってくるのが怖いので、別の指標がいいのではないかなと思う。また、令和6年度目標の12.1%というのは、全校の校長を呼んで、アンケートの取り方の指導をすれば、10%を切ると思う。前回の会議でも議論があったようだが、不読率というのが正しい指標なのかなと思う。I-checkはそれほど細かい指示がなく、たくさんある調査項目の中の一つなので、図書館で独自に調査を行った場合は、数字が変わってくるのかなと思う。高校生の数字がないが、墨田区内にも高校があるので、そこも巻き込んだ方が本当は面白い。それによって、もっと施策が広がるのではないかなという気がした。

**駒田委員** 1時間30分で読める本もあるが、私自身すごく分厚い本を2、3週間、下手をすると1カ月も抱えているときもある。学年が上がっていくと長編を読んだりすることもある。そういう子どもはとても真面目なので、この1カ月でまだ1冊も読み切っていない、と考えてしまう。

**高村館長** 墨田区だけでなく、全国レベルの調査なので、なかなか質問は変えられない。それなので指標としては、不読率だけを見るのではなく、その他のいろいろな指標を入れていきたいと思う。今までは不読率しかなかったが、今後はトータルで

考えて、読書推進をしていることが理解してもらえるようにしたい。

**上田会長** この第4章の「特別な支援を必要とする子どもの読書活動支援」で、18歳以下の障害者サービス利用者数を5倍にするというのがある。その下の蔵書数を1.5倍に増やすというのは図書費をある程度配分すれば達成可能だと思うが、60人を300人にするというのは、どうすれば可能なのだろうか。

**高村館長** 図書館サービスでの障害者というのは、児童に関して言えば重度障害者を対象にしている、例えばデイサービスに職員が出向いて、貸出しや読み聞かせをしたり、障害の程度に応じて天井にモニターを写したり工夫しながらやっている。しかし、今は軽度発達障害の子ども向けの放課後等デイサービスが区内でとても増えている。子どもが学校に行った帰りの放課後、一時的にお預かりするという施設だ。それらの施設に対して、出張サービスをして、その子どもたちの図書館利用を促していく。またLLブックや読みやすい本などを紹介していく。そうした活動をすることで、目標の累計300人を見込めると考えている。

**上田会長** 他には何か意見はあるだろうか。

**栗原オブザーバー** 子どもの読書のためにこうした場を設け、真剣に考えていただき感謝している。子どもの読書を促進するためには、一番は家庭かなと思う。家庭で身の回りに本がたくさんある環境が望ましいかと思う。私は子どもが4人いるが、子どもによって傾向が違って、上の子は黙って朝起きて読書をしたり、下の子は絵本や新聞が好きだったりする。今は共働きの家庭が増えているので、読み聞かせが困難な状況はあるが、そこを変えるのは難しいし、保護者の教育も困難だ。ただ、親を取り込むということは、図書館としてはできるかなと思う。私はひきふね図書館をよく使わせてもらっているが、ネットで予約ができたり、返却期限をメールでお知らせしてくれたり、ブックポストで返却できたりと便利な機能がある。そういった便利な機能をもう少し伝えることで、親も来やすい環境になるのかなと思う。例えば、子どもが図書館を見学したときに書庫を見て楽しかったり、CDやDVDもあって喜んだりする。そういう機会を増やすことで、子どもが親を誘って図書館へ行こうとなったりする。また、2階の入口にリサイクル図書があるが、1階に置いて、通りすがりの人に提供するとか、そういったことで本に興味を持ってもらうことができるのではないか。中高生は受験で忙しいということだが、逆に受験に役立つ本を紹介するとか、受験勉強の仕方を紹介しながら図書館を利用してもらうといった、受験のための施策もできるのかなと思う。

**高村館長** 保護者の方へのPRとして今考えているのは、保育園や児童館のイベントには保護者は参加していると思うので、そういうときに図書館が出張すれば、普段図書館に来ない人たちに直接PRできる。もう一つは、今ブックスタート事業というのを生後3、4カ月健診のときにやっているが、お子さんが生まれてばかりで、読書どころじゃないということもあるだろう。それなので子どもが生まれる前の母親・父親教室において、「お子さんが生まれたらこういうことをやってあげましよう」というPRも有効と思う。リサイクル本は、9月のイベントに出展する予定だ。



中高生の受験本については、今は学校紹介や勉強の仕方などの展示はしているが、受験対策までは踏み込んでいないので、今後検討していきたい。

**原委員** 今の皆さんの話を聞いていると、資料2の具体的な施策をもう少し詰めていった方が有意義なのかなと思った。資料2の表は、横列が発達段階で分かれていて、とてもいいと思う。ただもう少し詰めた方がいいかなと思っていて、例えば乳幼児の読書というのは、先ほども保護者に対してどのように働きかけるかが重要という話があった。絵本セットを鞆に入れて渡すとき、例えば5冊の内の1冊は子ども向けではなく母親向けの子育てに関する本にしたり、困ったときに使える近所の救急病院のリストが入っていたりすると、有用性が上がっていいかもしれない。小中高生は、学校との連携や図書館ボランティアとの横の連携が区としてあると、個々の小学校、中学校、高校の図書館ボランティアが活性するのではないか。中学校、高校は実は手つかずで、不読率の話からすると、中高生に対する働きかけというのが施策に入っていないといけなのではないかと思う。また特別な支援を必要とする子どもの読書活動支援というのは、実際には区役所との連携という話になるのだろうか。障害を持っている人がいる施設と連携して、そこでおすすめ本などがあるといいかもしれない。

**高村館長** 区内には外国にルーツを持つ子どもが多い小学校、中学校もあるが、そういう学校では英語の絵本がとても人気で、よく読まれているようだ。いろいろな国籍の方がいるので、まずは絵本の原書を揃えていきたいと思う。ヨーロッパ系の原書が多いので、ドイツ語、フランス語、イタリア語、ロシア語などの本を揃えておけば、ある程度需要には対応できると思う。また、今は英語教育が盛んに言われているので、日本人の方でも、日本語と原書の違いを比べて読むことで、楽しみながら語学の勉強にもなり、いろいろな文化の理解にいいかなと思う。

**原委員** 外国にルーツを持つ方は、近くに図書館があること自体を知らない人もいるのではないか。その人たちが普段よく行く場所において、図書館という場所があり無償で本を借りることができることを知ってもらうことが、区役所との連携によってできると、館長が説明した施策が効いてくるのかなと思う。図書館というものを一度理解してくれた人はその後も使うので、図書館を知らない人を幅広く集めていくことが必要なのではないかと思う。

**高村館長** そういう意味では、学校とも協力し、小学校や中学校の図書館見学を積極的に行って、保護者の方を含めて使い方を知ってもらう方法が有効かなと思う。施策の中では図書館見学という形で入れていくと、原委員が言われたようなことにある程度対応できるかもしれない。

**原委員** 資料2の取組の方向性を見ると、不読率などの目標に対して比較すると、「中・高校生期の読書活動の推進」というところが弱い気がして、これらをやっても不読率が5年で半減するとは思えない。自分の娘を見ていても、中高生になると動画サイトを見てしまう。小学校のときは、おすすめ本があったり、周りが読んでいるから読むということもあって、例えば「かいけつゾロリ」のシリーズが流行っ

たら、みんなが読むから読むということがある。しかし中学・高校になると、周りが読んでいるから読むではなくなってくるので、そのときに自分で本を選べるようになっていないと読書離れが進んでしまう。何でもスマホで検索ではなく、検索できないような調べ方や思考ができてこそ成長や発達と言えらると思うので、それらの施策がもっと入っているといい。先ほどの話で出た、中学校に図書館ボランティアがないとか、勉強があるので朝読書の時間が取りづらくなり放課後は部活があって帰宅したら疲れて寝てしまう、という厳しい現状もあるので、中高生の施策のところは目標の高さに比べて施策内容が弱いという印象だ。

**高村館長** 全部の施策を一斉に取りかかるのは難しいので、まずは小さい子どもの頃の読書習慣の基礎固めを行っていき、その次に中高生と考えている。確かに原委員が言われたように、中高生への取組が弱いというのは、そのとおりだと思うが、優先順位としては、まずは乳幼児、小学生を考えている。

**原委員** 資料1と資料2の間のギャップが大きいように感じる。立派な資料だが飾りになってしまったら、もったいない気がする。

**上田会長** いろいろな意見を出してもらった。他に何か意見があるだろうか。

**小川オブザーバー** 娘が4人いて一番下が中学2年生になったが、部活動などで忙しい現状だ。子どもが小さいときは近所の図書館に通って同じ本を何度も借りた。最初に本に出会うのは子どものときなので、まずは母親だと思うが、自分の経験では、国語の先生がとてもいい読み聞かせの時間を作ってくれたり、音楽の先生が音楽を聞きながら少し読書をしてくれたので、そこから本はいろいろな世界が広がるなということがあった。それなので私も子どもが生まれてから、一番目につくところに本棚を置こうと決めて、今も続けている。子どもが中学校になっても、小学校のときに自分たちが立ち上げた読み聞かせの会は、保護者の人たちはずっと続けてくださっている。司書の先生にも来てもらって、学校に行くたびにいいなと思っている。中学校になって子どもの授業時間も増え、本を読む隙間があるかなと思ったとき、子どもは朝読書の時間をすごく楽しみにしている。それなので、朝読書の時間は大切にしてもらいたい。中学校でも図書ボランティアを始めたいと私は昔から思っているが、そのことを子どもに言ったときに、「中学校にも来るの」と言われた。小学校に行くとき小さな子どもが寄ってきてとても楽しいが、中学生となると雰囲気が違う。けれども、そういうところも挑戦したいなと思う。

**井東主事** 以前、別の地区の中学校ボランティアの方と話をしたとき、同じようなことを子どもに言われたようだ。また、子どもが中学校に上がると働きたいという保護者の方がいて、なかなか時間が取れない。そこで考えようとしたのが、違う学校に行くということだ。小学校ですごく頑張ってもらった保護者の方たちが、小学校を卒業してしまうと行き場がないので、その人たちを活かすような横断的な団体を作って、別の学校に行くのはどうかという話もあったが、実現しなかった。学校側から、別の学校の保護者は入れないと言われたようだ。これからはわからないが、その当時はあくまでOBでやりたいという壁があったようだ。

原委員 先ほどの話のように、ボランティア同士の横の連携ができていれば、そこが土壌となり、「この人は知らない人ではない」ということがわかると、実現できてるのかもしれない。

## 議事第2

### その他について

上田会長 その他の事項について、事務局に報告をお願いしたい。

高村館長 資料3「墨田区立図書館電算システムの更新及び機器交換に伴う臨時休館について」を報告

上田会長 本日も皆様の活発な議論に感謝する。他になければ以上で、令和元年度第2回墨田区図書館運営協議会を閉会する。